

保育者養成における講義のシラバス分析とその課題に関する考察

— 保育内容（人間関係）を中心に —

The study of analyzed in syllabus of contents of childcare (human relations) for training courses for early childhood educators in university and junior colleges

田中 卓也・岩治 まとか

Takuya TANAKA・Madoka IWAJI

概 要

保育内容（人間関係）は、保育者養成にとっては欠かせない講義科目の一つである。本研究では、保育者養成大学・短期大学において保育内容（人間関係）の講義がどのように行われているのか、各養成校における講義シラバスの分析を通して、学習の教育的効果と課題の整理を試みた。

2016年の講義シラバスを分析した結果、各養成校において大方同一の内容が教えられていることがわかった。また、講義は名称の異なりや、時間の差異なども見られ、一部の養成校では授業時間数の不足から理解度も異なることを想起させることも明らかになった。したがって、準備時間の確保を含めた社会的コンピテンスを促進させる工夫のあり方が、今後の課題といえる。

キーワード：保育内容（人間関係）、幼稚園教育要領、保育所保育指針、保育者養成、幼児

Abstract

The contents of childcare (human relations) is indispensable to education, for training courses for early childhood educators in university and junior colleges. This study is clearly how to lecture on University and Junior college for childhood. According to analyze the syllabus of contents of lectures, be tried to organize details of effective in achieving the educational goals and issues.

Analyzed lectures curriculum and gathered data through the syllabus in 2016, the results showed relationships between the consider the two as one and the same things. It was sure that it was different from lecture names and times of lectures, achievements of understanding to shortage lack of lecture time. It is assumed that the faculty should consider more careful interventions into interactions within and among groups. In addition, the students with less sense of belonging and less anxiety tended to dropout at early stages. Potentially this questionnaire can take a role to identify students having difficulty to adopt their new life.

Keywords : contents of nursery, Course of study for kindergarden, the action of nursery activities school (a day-care center, training courses for early childhood educator, infant

目 次

- 1 本研究の目的と先行研究の検討 (田中 卓也)
 - 1.1 研究の目的
 - 1.2 研究方法
 - 1.2.1 分析対象
 - 1.2.2 分析内容
 - 1.3 先行研究の検討
- 2 「保育内容」(人間関係)という講義 (田中 卓也)
 - 2.1 保育所保育指針における保育内容の位置付け
 - 2.2 保育内容 (人間関係) の講義概要
 - 2.3 授業の名称
 - 2.4 単位数
- 3 「保育内容」(人間関係) シラバスにおける分析 (田中 卓也・岩治 まとか)
 - 3.1 授業計画
 - 3.2 「人とかかわる力」
 - 3.3 「気になる子どもへの対応」
 - 3.4 「子どもと保育者の信頼関係の構築」
 - 3.5 「保護者と保育者との人間関係」
 - 3.6 「協同性づくり」
 - 3.7 「道徳性のめばえ」
 - 3.8 「地域社会とのつながり」
- 4 まとめと今後の課題 (田中 卓也)

1 本研究の目的と先行研究の検討

田中 卓也

「保育内容」は、幼稚園教育における「幼稚園教育要領」の中に定められた教育課程の基準であり、幼稚園での保育は「幼稚園教育要領」が、保育所保育においては「保育所保育指針」を参考にするように通達されている内容である。執筆者は現在、四年制大学に在職しながら保育者養成に携わっているが、約10年ごとに国の法や制度が変わることによって、「保育内容」や「領域」の考え方が見直され、教育課程上どう位置づけられるのか保育者はじめとした関係者らは疑問を抱くことがある。

そもそも幼稚園教育の内容・方法については、1964（昭和39）に「学校教育施行規則」改正以降、国の基準である「幼稚園教育要領」において、基本的な方針、ねらいなどを示し、具体的な指導内容・方法は、各幼稚園の工夫に委ねられている。今回幼稚園教育における「保育内容」を論ずるあたっては、平成元年に改訂された「幼稚園教育要領」に焦点をあてた。理由はそれまでの幼稚園教育要領（昭和39年版）とは「保育内容」の考え方が大きく変わったことと、それ以降のものは平成元年の考え方を踏襲しているからである。

社会の変化に伴い家族構成を中心として、子どもたちを取り巻く環境が大きく様変わりしていく中で、保育者は「保育内容」をどのように考えていくべきなのか、法改正が現場にもたらす影響について検討することから始めたい。

本稿では平成元年改訂の教育要領によって「保育内容」がどのように変わったのか、また現場でそれがどのように受け止められたかを検討した。平成元年当時の現場の混乱が再度起きないために、伝達講習のあり方への提言と、教育要領の趣旨を把握し、それを実践する保育者に期待されるものを明らかにすることを研究目的とする。

ところで、保育内容におけるシラバス分析を主とした先行研究には、近藤清華・佐藤文子「保育士養成課程における科目『子どもの食と栄養』の現状と課題から－短期大学のシラバス分析から－」（www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf）や井上美智子「保育者養成系短期大学の一般教育科目における環境教育の実施実態」『近畿福祉大学紀要』第6巻第2号、2005年12月）が存在する。前掲した2つの研究は保育内容のシラバス分析を行ってはいるが、近藤・佐藤論文は主に「子どもの食と栄養」を対象としているし、井上論文は「保育内容（環境）」を主に取り扱っているので、執筆者が行う保育内容（人間関係）のシラバス分析とは研究対象を異にしている。また岡野聡子・田中卓也「保育内容『環境』の教授内容におけるシラバス分析の試み－SPSS Text Analytics for Surveysを活用して－」（日本教師学学会第18回大会、2017年3月2日、早稲田大学所沢キャンパス、口頭発表済）においても同じである。本研究を進める上で、今後の保育者養成における保育内容の教授・指導方法のあり方を考えるための契機になればと考えている。

1.2 研究方法

1.2.1 分析対象

保育士・幼稚園教諭養成を行っている私立短期大学の2016（平成28）年度シラバスを用いた。対象としたのは茨城県、群馬県、埼玉県、千葉県、神奈川県、東京都の6都道府県で、保育士、幼稚園教諭の資格・免許が取得できる私立短期大学、私立大学、国立大学とし、各大学・短大学のホームページから、シラバスの閲覧が可能だった60校とした。

1.2.2 分析内容

保育士養成・幼稚園教諭養成課程における授業科目の一つである「保育内容（人間関係）」の内容が授業でどのように行われているかを分析・検討した。授業名称および開講科目の修得単位数、さらに、現在、保育士・幼稚園教諭養成課程において使われているいくつかの教科書を参考に、項目を設定し、その項目内容が、大学や短期大学の授業において行われているか否かを分析・検討した。また、分析についてはシラバスの授業計画のみ分析するものとする。

2 保育内容（人間関係）という講義

田中 卓也

2.1 保育内容の位置付け

そもそも保育内容といわれる講義科目は、保育者養成課程の資格取得のためのカリキュラムとして、保育内容総論および各論と分けられて位置付けられている。「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」では、1989（平成元）年の改訂以降に、保育内容の各論といわれる保育内容（健康）、保育内容（言葉）、保育内容（表現）、保育内容（環境）、保育内容（人間関係）の5領域に分けられ、領域ごとに保育のねらいや内容がまとめられている。

ねらいと区別される保育内容は、幼稚園や保育所、幼保連携型認定子ども園などにおいて、子どもたちに何を経験させたらよいのかという「何を」の内容を示している。具体的には日常生活のなかで子どもが行う遊びや、子どもの年齢に応じて身につけさせたい活動や取り組みのことである。

「幼稚園教育要領」（2008年改訂版）によれば、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」と明記されている。また「1 ねらい」については、「(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。(2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」とあり、人間関係の基礎の土台が築かれることが期待されている。また「内容」については、(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。(2) 自分で考え、自分で行動する。(3) 自分でできることは自分でする。(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。(5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。(9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。(10) 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。

(11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気づき、守ろうとする。(12) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」と13項目が示されており、身の回りに存在する「友達」、「先生」、「高齢者」との人間関係を構築することが求められている。

また「保育所保育指針」は、保育所における保育の内容やこれに関連する運営等について定めたものであり、1956（昭和31）年に「幼稚園教育要領」の公布時に出された。保育所における保育は、本来的には、各保育所における保育の理念や目標に基づき、子どもや保護者の状況や地域の実情等を踏まえて行われるものであり、その内容については、各保育所の独自性や創意工夫が第一義的に尊重されるべき」ものであり、「すべての子どもの最善の利益のためには、子どもの健康や安全の確保、発達の保障等の観点から、各保育所が行うべき保育の内容等に関する全国共通の枠組みが必要」であったことから、「保育指針において、各保育所が拠るべき保育の基本的事項を定め、保育所において一定の保育の水準を保つこと」が求められるようになった。

保育指針は、保育所保育にとどまらず、他の保育施設や家庭的保育などにおいても、ガイドラインとして活用されている。内容はほぼ同一のものである。

2.2 保育内容（人間関係）の講義概要

保育内容の講義概要を見てみたい。多くの大学・短期大学では「社会構造の変化により、子ども達を取り巻く環境も大きく変容したため、その影響の一つとして、子どもの育ちに「人とかかわる力」の不足が指摘されていることをふまえながら、特に乳幼児期の重要性に着目し、人とかかわりが育つ過程を学ぶ。また、幼稚園、保育所での集団生活の意義、「人間関係」の基礎を築いていくための保育者の役割を学ぶ」とか「子どもの心身の発達とともに広がっていく人間関係の発達を支えること、自己の確立と他者の共感的理解・コミュニケーションの大切さを学び、「人と関わる力を養う」という重要な保育者の役割を認識することを目的とする。現代社会の諸問題を捉えつつ、その社会の中で育つ子どもにとって「人との関わり」を育成していく保育施設の役割を学ぶ。さらに乳幼児の人間関係の発達の実際、その抱える諸問題、対応など実践事例を加えながら保育者としての学生の資質を向上させる。領域「人間関係」のねらいと内容をしっかり理解し、把握し、実践に向けての指導力を身につける」などのように見られる。

2.3 授業名称

授業名称において、「保育内容（人間関係）」の科目名を用いていたのは40校（67%）、「保育内容研究（人間関係）」の科目名を用いていたのは12校（20%）、その他（保育内容指導法、保育内容演習、こどもと人間関係、人間関係指導法）8校（13%）であった。この背景には、厚生労働省が2011（平成23）年度から、保育士養成課程の教育カリキュラムの全面的な見直しを行い、従前の「保育内容」から「保育内容（人間関係）」と科目名を変更したことに関係し、多くの大学・短期大学において、科目名の変更を行ったと考えられる。

2.4 単位数

保育士資格および幼稚園教諭免許取得に必要とされる「保育内容（人間関係）」の単位数は演習科目2単位となっている。授業回数15回（半期科目）のみ2単位科目としている大学・短期大学は9校（15%）、授業回数30回（通年科目）2単位科目としている大学・短期大学は42校（70%）、授業回数30回（講義科目として2単位、演習科目として1単位）3単位科目としている短期大学が9校（15%）であった。

このことから主に多くの大学・短期大学では「保育内容（人間関係）」に関する内容を15回のみとしていることがうかがえる。全ての大学（4年間）・短期大学（2年間）において、保育士資格のみならず、幼稚園教諭の免許状を取得するため、カリキュラム上最低限の単位数に抑えているのであろう。

3 保育内容シラバスによる分析（結果および考察）

田中 卓也・岩治 まとか

3.1 授業計画

保育者養成大学・短期大学におけるweb上で公開されている「保育内容（人間関係）」のシラバスの「授業計画」を収集し、授業内容の情報を分析した。保育内容（人間関係）の指導上のポイントとされる、(1)「人とのかかわる力」(2)「気になる子どもへの対応」(3)「子どもと保育者の信頼関係の構築」(4)「保護者と保育者との人間関係」(5)「協同性づくり」(6)「道徳性の芽生え」(7)「地域社会とのつながり」の7項目を選び出し、分析を行うものとする。

3.2 「人とのかかわる力」

「授業計画」に最も多く記述されている内容は、「人とのかかわる力」であり、45校（75%）で見られた。「子どもの育ちにとって人間関係はなぜ大切なのか?」、「人とのかかわりと乳児期の発達」、「人とのかかわりと幼児期の発達」、「遊びの中の人とのかかわりの育ち」、「0歳児の人とのかかわりと保育」、「1歳児の人とのかかわりと保育」、「2歳児の人とのかかわりと保育」のような同様の内容のものも見られる。「人とのかかわる力」と単独講義の場合の方がむしろ多く、45校のうち、30校（67%）を占めている。子どもの年齢ごとに「人とのかかわり」を教えることになっている養成校は10校（22%）に止まっている。15回の全授業の指導内容が多岐にわたっていることから、あまり多くの時間を割けないところが実状であろう。

またこの内容は、授業計画の中で前半（第1回から第5回）において行われることも多く、45校のうち、25校（56%）の養成校が行っている。「保育内容（人間関係）」を講義する中で、基礎的で重要な内容であることを印象づける。

3.3 「気になる子どもへの対応」

「『気になる子ども』と保育者の視点」、「特別な支援を必要とする子どもへの援助」、「特別なニーズをもつ子どもへの理解と対応」、「多様性を受け止める力を育む学級経営」、「気にかかる子どもへの援助」、「人間関係で気になる子ども」などのような授業内容が見られる。30校（50%）の保育者養成校において、特別支援教育の視点が入っていることがうかがえる。「特別支援教育」は2007（平成19）年にそれま

での養護学校、聾学校、盲学校の三校を統一する形で、「特別支援学校」と呼称されることになったのが契機であり、以後幼稚園、保育所でも取り入れられるようになってきた。吉川寿美・那須信樹「幼稚園における特別支援教育の充実に向けた園内体制づくり—大学発達支援センターによる支援効果と課題—」(www.nakamura-u.repo.nii.ac.jp)によれば、全国の保育所で障害児保育を実践している園は、2008年で全体の68.0%であり、2012年には全体の74.8%を占めるようになったとされている。また、障害児保育対象以外でも特別な支援が必要な子どもの居る保育所は84.3%とほとんどの保育所になんらかの支援を要する子どもが在籍しているとされている。しかし就学前教育は、特別支援教育への取り組みが遅かったことも指摘されている。権藤圭子「幼稚園における特別支援教育の必要性」(『立教女学院短期大学紀要』第37巻、2006年)では、幼稚園においては、多くの場合、子どもたちや保護者の受け入れ体制が整備されないまま、保育実践や保護者支援が行われていたり、行わざるを得ない状況が存在するとの指摘がある。

かくして、「保育内容(人間関係)」で「気になる子どもへの対応」を教えることになるのは、前述したように特別支援教育の遅れに起因しており、保育者にもこれから大切となる事項であると考えることができる。

3.4 「子どもと保育者の信頼関係の構築」

「子どもと保育者の信頼関係の構築」、「親との出会いとかかわり」、「保護者や友達との出会いとかかわり」、「保育者とかかわり(自己主張を受け止める)」、「子どもと養育者の関係」などの表記がみられる。22校(37%)の保育者養成校において行われている。間違いなく、保育者が仕事をしていくうえで、子どもとの信頼関係を構築することは大切であることは周知のことであろう。かつての保育では、子どもとの信頼関係を築くうえで特に意識する必要はなかったといわれている。それは保育者が幼稚園や保育所において行わなくても、子どもが家庭に戻れば、家庭の養育力や養育環境、大人の精神的・時間的余裕などがあり、自然と大人の存在を認識し、信頼することを身につけさせることができていたからである。子どもによっては、過保護に育てられた子どもや経験不足などの子どもはいたにせよ、大人を信頼する点においては、すでに獲得してきた状態であったことで、通園しながら、家庭において家族との間に信頼関係を育むことのできる環境が整備されていたのである。

しかしながら現在では核家族が増加し、子育てに祖父母などの身近な家族のサポートが得られることも少なくなり、地域社会が子育てを自然と手助けするような環境もない状況である。温かな家庭的雰囲気でも過ごすよりも、幼少期から「早期教育」、「習い事」などの過剰な期待が子どもにのしかかり、子育てを行う余裕が見られなくなっている。

このような状況であるため、子どもらは信頼関係を築くことができず、人とかかわりに心地よさを感じていなかったり、不安が強くて情緒が不安定になっている子どもも非常に多くなっている。

かくして保育者は時代の変化を感じ取りながら、信頼関係の構築していく意識を持たなければならないのであり、保育者は子育ての専門家として家庭や親だけでは不足している箇所を補助することからはじめていかななくてはならない。すなわち子育て支援や家庭支援が重要であることが認識されなければならない。

3.5 「保護者と保育者との人間関係」

「保護者と保育者の人間関係」「保護者と保育者の関係 保護者と信頼関係を築くために」など関連する用語が使用されている。18校(30%)の養成校で使用していることが確認できる。保育者は子どもとの信頼関係を作っていく以上に保護者との信頼関係も同じく重要なことであることは誰もが認めるところである。まずは保護者への第一印象が重要である。保護者と初めて会う際の印象が悪いのであれば、その印象を消すためにはかなりの労力が伴うことになる。第一印象ではおもに「外見」、「態度」、「表情」、「口調」の4つは大きな要因とされており、努力を怠らないことが求められる。

また連絡帳への筆記についても情報共有のパイプラインとなるため、しっかり書くことが求められる。保護者は幼稚園・保育所での子どもの様子について期待している。子どもががすくすく成長していることが伝わる楽しい雰囲気を書かれていれば、保護者の多くは安心感を抱くであろうし、面倒をみってくれる保育者に信頼感を得ることになる。しかしながらマイナスの要素を書いてしまうことで、保護者には不安感を与えることになる。たかが連絡帳とは考えず、小さなコミュニケーションとしてコツコツ取り組んでいくことが求められる。

3.6 「協同性づくり」

「協同性づくり」のほか「協同性を育む」、「協同性の育ちと就学前教育のあり方など、これからの幼児教育・保育の方向と領域『人間関係』の課題」、「協同する経験と保育者のかかわり」、「5歳児の人間関係(2)協同的な遊び」「友だち関係の役割と協同性を育むための保育者の役割を理解する」などの関連する用語が使用されている。保育者養成校では12校(20%)においてこの内容が行われている。幼稚園教育要領では「人とかかわりに関する支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」ことを目的に、「社会生活における望ましい習慣や態度を身につける」をねらいに掲げている。また内容には「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」や「友達と楽しく生活する中で、きまりの大切さに気付き、守ろうとする」と記述されている。しかしながら子どもたちは友達を誘い、遊ぶことは楽しめるのであるが、遊びにおいて自分の思うようにならないと、言葉や態度で相手を嫌な思いにさせたり、みんなの活動を進める中で、ふざけた態度をとる子どもも見られる。主体性や調和のとれた心を育むことが大きな課題となっていると考えられる。この教える時間がやや少ないのは気がかりな点であり、今後の保育者養成校がそれぞれ力を注いでいかななくてはならないものであるともいえよう。

3.7 「道徳性のめばえ」

「道徳性のめばえ」以外にも「道徳性と芽生え」、「子どもの道徳性の芽生えと保育者のかかわり」、「規範意識のめばえと保育内容」、「道徳性、規範意識を育む」、「自由と管理、自律と他律」、「道徳性の発達①他律的道德から自律的道德へ道徳性の発達」、「道徳性の発達②思いやり 規範意識を育てる」といった関連用語が使用されている。保育者養成校では12校(20%)がこの授業を行っている。道徳性を身につけることは大切であるものの、難しいものであることもわかっている。幼児の取り巻く環境が急速に変化を遂げている中で、とくに家庭環境においては、少子高齢化社会になってきたことや、核家族化の進行により、「一人っ子家庭」が増大している。これに伴い、兄弟姉妹同士で

けんかやいざこざ、切磋琢磨することや、祖父母から学ぶといった機会を失いつつある。また親の子どもへの接し方についても無責任な放任主義、過剰な過保護や過干渉といった傾向が目立つようになってきた。さらに他者を思いやる気持ちを持つことや望ましい人間関係を築けずにいる子どもも多い。しかしながら子どもだけの問題ではないことも否定できない。子どもたちの心の問題は、大人の心の問題であるともいえるのではなかろうか。大人社会にはびこる自己中心的な行動や暴力行為、性的情報およびいやがらせなどの風潮は、幼児期から子どもたちの心に影を落としているといえる。大人社会の規範意識が揺らいでいる以上、確固たる信念のもとで、多くの親は子どもの心の育成のための姿勢を気づけていないのではないかと危惧する状況になるようにも考えられる。これには大人の反省も大きく影響していると捉えることができよう。

3.8 「地域社会とのつながり」

「地域社会とのつながり」は、他にも「地域住民と園とのかかわりと子どもの育ち」、「地域と人間関係」、「園・家庭・地域における人間関係」等の用語が使用されている。6校（10%）が授業を行っていることがわかっている。地域社会においては、地縁的な連帯や繋がりが夜遊び、人間関係の希薄化を生み出しているのは、すでに知られている事実である。そのために子どもたちの成長の糧となる生活体験や自然体験などが失われてきている。この関わりがなくなっている状況下において、他者を思いやったり、共同作業を行ったりすることは難しくなっている。子どもは社会に適応するために必要な知恵を家庭や学校のみならず、地域においても得ている。とりわけ地域は子どもによって、様々な年齢層の立場の方とふれあうことで、社会経験を重ねることが可能となり、社会性や公共性を身につけることができるのである。このことからわかるように地域における教育はとても重要なことといえよう。

地域における教育には、地域がもつ子どもらの非行の防止の役割も担っている。子どもらを非行に走らせないためにも、地域社会の人々が昔のように、よその家庭の子どもにも遠慮なく叱ったりすることや普段から近所付き合いをしながら、家族同士の交流を高めることも大切となる。また日頃から地域の子どもたちに声がけをするなどの方策は少なくないのである。

また地域の子育て支援についてもふれてみたい。子育ては家族を中心にして「一義的なもの」であるが、子育てする家族への子育て支援の期待が高まっていることも挙げておきたい。地域にある幼稚園や保育所がいわば「子育て支援機能」を有しながら、子育てに関する悩みを気軽に相談できたり、子育てする親同士が気軽に話ができたりなど、仲間作りに一役買ったり、さらには子育てに関連する「情報の提供が簡単にできるようなことも求められている。

4 まとめと今後の課題

田中 卓也

関東地方に存在する四年制大学および短期大学における保育者養成課程科目「保育内容（人間関係）」の授業内容から、主として扱われている内容は、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」のねらいに見られるように、「(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。(2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」とあり、人間関係の基礎の土台が築かれることが期待されている。また「内容」については、(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。(2) 自分で考え、自分で行動する。(3) 自分でできることは自分でする。(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。(5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。(9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。(10) 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。(11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。(12) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」であるが、幼稚園や保育園を中心とした人間関係（子ども、保護者、保育者）について教えられることが多く、高齢者をふくめた地域との関わりに関する講義時間が少ないことがわかった。

しかしながら「協同性をはぐくむ」のように、最近の子どもらを取り巻く問題の解決につながるような内容も盛り込まれている。昨今では小学生においても携帯電話を持ち歩きながら行動する時代を迎えた。これに伴い、いつでもどこでも友人と連絡がとれるようになり、メールのやりとりをはじめ SNS といったツールを利用しながら、人間関係が広がるようになった。しかしながら本来の友人関係としてつながっているのか、という疑問も存在する。それは一見繋がっているように見えるが、特定の友人とのみつながりを持たず、周辺にいる友人にも無関心であり、人間関係が広がるどころか、狭い友人関係の中で仲間社会を作りだしているのである。このように子どもを取り巻く環境の変化により、幼児においてもその影響が色濃く出ており、人とのかかわりの希薄さが心配されている。

幼児期に協同的な活動経験を積むことで、幼児教育とこれからはじまる小学校教育のなめらかな接続にもつながっていくものであるといえよう。

将来、保育者を志す学生にとって、地域社会との結びつきは必須である。今後の保育者養成を考える上で、人間関係の構築は大変重要なことである。今後は「保育内容（人間関係）」のカリキュラムの内容を追究していきながら、新たなカリキュラムモデルを提示する必要があると考える。

さらに「保育内容（人間関係）」の講義を担当する者に直接お会いすることで、授業内容を確認し、実際の授業を観察する方法が必要である。シラバスはあくまでも限られた時数によって、授業内容を紹介した資料であるため、詳細なものにはならない。今後は保育者養成に必要な保育内容（人間関係）の講義の在り方についても追究していく必要がある。

【参考文献】

- ① 近藤清華・佐藤文子「大学における家庭科教員養成カリキュラムの現状と課題（第2報）－シラバス分析から－」『日本家庭科教育学会誌』第47巻、2004年。
- ② 井上美智子「保育者養成系短期大学の一般教育科目における環境教育の実施実態」『近畿福祉DS愛学紀要』第6巻第2号、2005年12月。
- ③ 後藤範子「4年生大学における保育士養成教育と資質能力向上に関する一考察」『東京家政学院大学紀要』第51号、2011年。
- ④ 山本直樹「保育者養成における『劇表現指導法』のカリキュラム・モデルと補助教材の開発」（『平成24年度科学研究費助成事業（若手研究B）研究成果報告書』課題番号・24730687）。
- ⑤ 近藤清華「保育士養成課程における科目『子どもの食と栄養』の現状と課題から－短期大学のシラバス分析から－」（www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf）
- ⑥ 権田あずさ・今川真治・鈴木明子「中等家庭科教員養成における教科に関する科目『保育学』の内容検討－教員養成系大学のシラバスを手がかりとして－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』（第二部）第64号、2015年。
- ⑦ 岩崎桂子「保育者効力感研究の現状と課題」『小池学園研究紀要』第4号、2014年。
- ⑧ 朝木徹・鈴木由美「子どもの人間関係を育む保育実践の要因－保育者効力感と子ども観の関連について－」『聖徳大学児童学科研究機用』第11号、2009年。
- ⑨ 田中裕子「日常保育における子ども同士の人間関係を育む取り組み－SST技法を用いて－」『愛知教育大学 幼児教育研究』2006年。
- ⑩ 牧正興「幼稚園満3歳入園における保育内容（人間関係）の課題と展望－満3歳入園調査研究委託の実践を通して－」『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』第8号、2007年。
- ⑪ 厚生労働省『保育所保育指針解説書』、東洋館出版社、2008年。
- ⑫ 文部科学省『幼稚園教育要領解説書』、フレーベル館、2008年。
- ⑬ 安部孝「短期大学における『心の教育』の課題1－展開の構想における『困難性』－」『埼玉純真短期大学研究論文集』第2号、2009年。
- ⑭ 安部孝「保育者養成における『心の教育』の課題1－展開の構想における『困難性』－」『埼玉純真短期大学研究論文集』第4号、2011年。
- ⑮ 青柳宏「『協同性』を育むとは：保幼小連携のために」『平成24年度 第6回共同機構研修会』（京都市子育て支援総合センターこどもみらい館）

